親子ひろしま訪問団

令和元年度訪問の記録

令和元年（2019年）8月５日～7日

秦　　野　　市

～ 目 次 ～

はしがき ・・・・・・・・・・・・ P1

Ⅰ　親子ひろしま訪問団

　１　訪問の概要 ・・・・・・・・・・・・ P3

　２　訪問団員（参加者）の声 ・・・・・・・・・・・・ P15

　３　団員名簿 ・・・・・・・・・・・・ P19

　４　訪問団規約 ・・・・・・・・・・・・ P20

Ⅱ　はだの平和の日のつどい ・・・・・・・・・・・・ P21

Ⅲ　資　料

　１　秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文 ・・・・・・・・・・・・ P22

　２　広島市平和宣言 ・・・・・・・・・・・・ P23

　３　(広島)こども代表「平和への誓い」 ・・・・・・・・・・・・ P25

◆訪問団の主なスケジュール

日　　時	項　　目	内　　容
7月19日(金) ① 午後2時 ～3時 ② 午後3時半 ～4時	①　説明会	訪問日程等の説明、「はだの平和の日のつどい」での報告方法検討
	②　結団式 市長表敬訪問	市長メッセージ・千羽鶴の受渡し 場所：秦野市役所西庁舎３階 大会議室
8月5日(月) ～ 8月7日(水)	広島訪問	①　原爆の子の像へ千羽鶴を拝納 ②　広島平和記念資料館見学 ③　平和記念式典参列 ④　被爆体験聴講 ⑤　平和記念公園内碑めぐり ⑥　とうろう流し ⑦　宮島見学
8月17日(土) 午後5時半 ～5時50分	はだの平和の日 のつどい	訪問の活動報告 場所：秦野市文化会館ホワイエ

はしがき

広島・長崎に原爆が投下され、多くの尊い命が奪われてから、７４年もの月日が経ちました。今でも原爆の後遺症や心の傷で苦しむ方がたくさんいる一方で、復興の努力の中、平和を訴えてきた戦争体験者は減少の一途をたどり、悲惨な記憶の風化が進行しつつあります。また、現代社会の中でも、いじめや虐待、殺人により尊い命が奪われるといった悲しい報道が毎日のように流れ、世界ではいまだ紛争が絶えず、私たちが希求する平和な社会と言える状況にはないように思われます。

戦後５０年を契機に始まった「親子ひろしま訪問団」は、今年で２５回目を迎えました。今年で、２４０名の親子が広島を訪問しました。今年は台風の影響で、平和記念式典の最中には雨が降りましたが、その他の行程は天候に恵まれました。７４年前のこの日、この場所で、原爆が一瞬にして多くの人々の生活とその尊い命を奪ったことを思うと、言葉もありません。

戦争を起こしたのも人間、傷つき立ち上がって生きるのも人間。「人が人を傷つける」という出来事がたびたび報道されている昨今、訪問団員１０名にとって、平和記念資料館の見学、平和記念式典への参列、被爆体験談の聴講などの経験は、改めて平和であることや命の重みを考える大変良い機会となったと思います。

また、訪問終了後には、訪問団が被爆地で肌で感じ、学んできたことを広く市民へ継承していくため、８月１７日に「はだの平和の日のつどい」を開催し、多くの観客が見守る中、活動報告を行いました。訪問団員の生の声が、会場の人々の心に届いたと思います。

本市では、核兵器廃絶、非核三原則の堅持、恒久平和を柱とした「平和都市宣言」を定め、また、広島及び長崎両市が主導する「日本非核宣言自治体協議会」や「平和首長会議」に加盟し、平和への思いを発信しています。

平成２０年６月には、市民一人ひとりが改めて平和の大切さや命の尊さを考える機会として、８月１５日を「平和の日」と制定しました。毎年「平和の日」に近い日程で、市民を主体とした様々な平和事業を展開しています。

また、平成２１年８月には、市内事業所の協力を得て、市役所に「平和の灯モニュメント」を、自治体としては全国で１４か所目、神奈川県内では初めて設置しました。このモニュメントの種火は、同年の「親子ひろしま訪問団」が広島平和記念公園から採火し持ち帰った炎を、「平和のシンボル」としてともし続けています。

今年、訪問団が広島市に届けた千羽鶴はおよそ１万４千羽にもなりました。一羽一羽、平和を願いながら、丁寧に折っていただいた多くの市民の皆様に、心からお礼を申し上げます。抱えきれないほどの千羽鶴の重さに、鶴を折られた皆様の思いを感じながら、心を込めて鶴を捧げました。

平和記念式典への参列や被爆体験談の聴講などの貴重な経験を含め、被爆地広島で見聞きし学んだことを、団員一人ひとりが心に刻み込み、その思いを多くの人々に伝え、また次代へと語り継いでくれることを心から願います。

秦野市文化スポーツ部文化振興課

Ⅰ　親子ひろしま訪問団

１　訪問の概要

(1)　訪問１日目・８月５日（月）

８：０８　　小田原駅出発

１１：３８　　広島駅着

１４：００　　広島平和記念公園見学

　　千羽鶴を「原爆の子の像」に捧げる

１５：００　　広島平和記念資料館見学

「原爆の子の像」の前で千羽鶴とともに

原爆の子の像

この像のモデル佐々木禎子氏は、２歳の時に爆心地から１．７キロメートルの自宅で被爆しました。足が速く、とても元気な子でしたが、小学６年生の時に原爆症を発症しました。入院中、鶴を千羽折れば病気が治ると言われ、信じて折り続けましたが、中学校に入学できずに亡くなりました。

「原爆の子の像」は禎子さんが通った小学校の同級生たちの呼び掛けにより、全国の学校や外国からの支援により建てられました。

平和な未来へ夢を託す少女の像

原子力の研究でノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、この子どもたちの気持ちに感動し、博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫られた鐘を寄贈しました。その鐘の下に金色の折り鶴がつるされ、風鈴式に音が出るようになっています。この鐘と金色の折り鶴は平成１５年に複製されたもので、オリジナルは広島平和記念資料館に展示されています。

市民から寄せられた千羽鶴の拝納

訪問団は、広島到着後、市民から託された千羽鶴を手に広島平和記念公園へ向かい、原爆の子の像に捧げました。平和記念公園には世界中から大勢の人々が

集まり、原爆の子の像にもたくさんの千羽鶴が捧げられていました。

平和記念公園

この地域は、元々は広島でも有数の繁華街でした。しかし、爆心地に近かったため、原爆投下により壊滅しました。

その後、昭和２９年（１９５４年）に平和を祈念し、建築家の丹下健三氏の手により公園として生まれ変わりました。

園内には平和記念資料館をはじめ、原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、平和の灯、平和の鐘など多くの碑やモニュメントなどが設置されています。

毎年、原爆が投下された８月６日には「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（平和記念式典）」が開催され、夜には元安川をはじめ市内六つの川で犠牲者を慰霊する「とうろう流し」が行われています。

平成２８年５月には、バラク・オバマ前大統領がアメリカ合衆国大統領として初めて訪れ、原爆死没者慰霊碑の前で、核兵器なき世界の実現へ向けた思いをスピーチしました。

平和記念資料館

平和記念資料館は、被爆の実相を伝え、核兵器のない平和な世界の実現に貢献するために開設されました。本資料館は、平成２９年度に改修工事が完了した東館と今年４月にリニューアルオープンしたばかりの本館の二つの建物からなります。本館を入ると、原爆で負傷した痛々しい姿の少女や人影が残る石など、被爆の実相を伝える展示が続きます。「魂の叫び」と題された展示では、熱線で溶けた三輪車や黒焦げになったお弁当などの遺品から、人々の何気ない日常が一瞬で奪われてしまったことに胸が痛みました。東館では、プロジェクションマッピングやタッチパネル等、最新技術を駆使した展示があり、他の展示で見逃したポイントを復習できる仕掛けもあります。

また、核実験への抗議文を展示してあり、その数は６００通以上、人類最初の被爆地として、強く、地道に訴えを発し続けています。

平成２８年５月に資料館を訪れたオバマ前大統領は、東館１階ロビーで、同行した安倍晋三内閣総理大臣と共に核兵器廃絶に向けたメッセージを記した後、自らが折った４羽の鶴を広島市へ贈りました。今も東館１階に展示されているその折り鶴は、静かに、そして強く、訪問団員の心に戦争や原爆の悲惨さを訴えかけました。

⑵　訪問２日目・８月６日（火）

８：００　　原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式参列

１０：００　　被爆者体験談の聴講

１３：３０　　平和記念公園内の碑めぐり

１９：３０　　とうろう流し

それぞれの平和への思いを灯篭に込めた

原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

毎年８月６日に、被爆者、政府、自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列し、原爆死没者の冥福と恒久の平和を願って行われています。

平和宣言を行う松井広島市長

午前８時に開会し、松井一實広島市長と遺族代表が、原爆死没者名簿を原爆慰霊碑に納めました。

この１年間に新たに亡くなったり、死亡が確認されたりした被爆者は５，０６８名。名簿搭載者の総数は３１万９，１８６名に、名簿の数は１１７冊となりました。

黙とうを捧げる団員たち

原爆が投下された午前８時１５分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼と不戦の誓いを新たにしました。

黙とう後、松井一實広島市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「平和宣言」が発信されました。広島市は、平成１０年（１９９８年）から核兵器保有国の駐日大使の式典への参列を求める取組を開始し、今年は、過去２番目に多い９５か国と欧州連合代表らが参列しました。

松井市長は平和宣言で、世界で台頭する自国第一主義に対し警鐘を鳴らし、人類存続に向け、国際的に協調体制をともにする理想の世界を目指す大切さを訴えました。そして、各国の為政者に対し、ＮＰＴ（核不拡散条約）に義務付けられた核軍縮を誠実に履行し、核兵器禁止条約を核兵器のない世界への一里塚とするための取組を進めるよう求めました。

訪問団は、初めて参列する式典の、テレビを通して見る様子とは異なる厳粛な雰囲気に緊張しながら、参列する多くの被爆者及び遺族とともに黙とうを捧げました。子どもたちは、広島市長や安倍晋三内閣総理大臣の挨拶、同年代であるこども代表の誓いの言葉に真剣な表情で耳を傾け、平和への思いとこの貴重な経験を、心に刻みました。

原爆死没者慰霊碑

平和記念公園の中央に位置する、古墳時代の家形埴輪に似たデザインの碑で、中央の石室には原爆死没者名簿が納められています。碑の正面には、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」という言葉が刻み込まれています。

この静かで短い言葉には、原爆死没者への哀悼と、戦争という過ちを二度と繰り返さないという平和への願いと誓いが込められており、見る者の心を打ちます。

原爆慰霊碑、祈りの泉、嵐の中の母子像、資料館、平和の灯は、一直線で結ばれるように設計されています。

直線上に原爆ドームが見える設計になっている

平和の灯

昭和３９年（１９６４年）８月１日建立。当時、東京大学の教授だった丹下健三氏の設計により、全国１２宗派から寄せられた「宗教の火」や溶鉱炉などの全国の工場地帯から届けられた「産業の火」が、昭和２０年（１９４５年）８月６日生まれの７名の女性により点火されました。

建立の目的は「水を求めてやまなかった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求するため」。この火は、点火された日以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核の象徴です。

本市にも分けられた平和の灯

本市では、平成２１年８月６日に、平和の象徴として、市役所本庁舎玄関横に「平和の灯モニュメント」を設置しました。同年の親子ひろしま訪問団がこの「平和の灯」から採火し持ち

帰った火が、燃え続けています。

被爆体験談聴講

平和記念式典参列後、講師の増岡清七氏から被爆体験のお話を伺いました。増岡氏は、被爆当時の状況やその時の恐怖について子どもたちにも分かるよう丁寧に話し、その言葉は、戦争そして原爆の恐ろしさ、平和の大切さを訪問団に静かにしかし強く訴えかけました。

【被爆体験談（増岡清七氏のお話から抜粋）】

昭和２０年(１９４５年)８月６日は、建物疎開作業のため、約８，３００名の中学生が作業をしていた。学徒動員令により当時の中学生は、夏休みもなく工場等で作業や建物疎開に従事することになっていた。

建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぎ、住民の避難場所のために建物を壊し、空き地をつくることで、当時、県庁や市庁舎周辺は建物疎開で空き地となっていた。当日、増岡氏を含む３年生の半数の７０名は、爆心地から約１キロメートルの場所で、引率の先生の話を聞いていた。

午前８時１５分、突然、左からの風で押し上げられ、地面にたたきつけられた。そのまま意識を失い、原爆特有の「ピカ（光）ドン（音）・きのこ雲」の記憶はなかった。

意識が戻り、見渡すと夜のように真っ暗な中、空から火が降って見え、悲惨な状況が広がっていた。原爆が落ちたと知ったのは後のことだった。

生き残った学友たちを見ると、みんな皮膚が垂れ下がり、一見誰だか分からないほどの形相だった。熱で剥がれた皮膚は、爪のところで止まり、とぐろを巻くように垂れ下がっていた。

増岡氏も左顔面や腕など皮膚が垂れ下がっていた。何が起こったのか、どこが安全なのかも分からないまま、爆心地から市外へ必死で逃げた。炎に焼かれ、死に逝く人たちを見ながら、とにかく「死にたくな

増岡清七氏（広島市在住）

爆心地から約1kmで被爆。当時中学3年生。

戦後、高校で教鞭をとっていたが、退職後、「被爆語り部」として、反核・平和を訴え続けている。

現在、「広島県高等学校被爆教職員の会」会長。

い」一心で逃げた。「生きたい」ではなく「死にたくない」という気持ちで。「生きたい」には希望があるが、「死にたくない」は絶望の中で感じること。広島の市街が炎で燃え上がっている中「死にたくない」とたどり着いた防空壕には、人が重なり合い、あふれていた。

被爆体験談聴講

ひん死の状態で、水や家族を求めていた。木陰でそのまま眠ってしまったところを翌日、救助隊の馬車で市外の民家の座敷に運ばれた。既に多くの人が丸太のように横たわっていた。この時、初めて汚い布で患部を拭いたが、治療はされなかった。

翌日、汚い茶碗によそわれたお粥が１杯置かれたが、皮膚のうみで左目と口が開かず、食べるのに困った。皮膚が垂れ下がった左顔面や腕に太陽の光が当たると、針でチクチク刺されるような痛みが続いた。数日後、行方を必死で探してくれた父親と再会し、荷車に乗せられ親戚宅に行った。

その時は、増岡氏の体を気遣って教えられなかったが、自宅は全壊、母親は即死していたと、後に父親から伝えられた。療養のための旅行で留守にして死を免れた父親も翌年、増岡氏が１５歳のときに亡くなった。恐らく、増岡氏の行方を探すために原爆投下直後の広島の街を歩いて回る中で、残留放射能を浴びてしまったためと思われる（入市被爆）。火葬する設備がなく、自分自身でだびに付した。既に兄は特攻隊員として沖縄で戦死しており、家族は姉と二人きりになってしまった。

学友たちも多くが原爆により亡くなったが、そのうちの一人の遺品が、平和記念資料館に展示されている。

原爆ドーム

後に「原爆ドーム」と呼ばれるこの建物は、大正４年（１９１５年）に広島県の物産品の販売促進を図る拠点として建設され、建設当時は「広島県物産陳列館」という名称でした。その後、「広島県産業奨励館」と改称されましたが、県内の物産品の展示・販売を行うほか、博物館、美術館としての役割も担っていました。

しかし、戦争が激しくなった昭和１９年（１９４４年）３月、産業奨励館としての業務が廃止され、内務省中国・四国土木出張所や広島県地方材木・日本材木広島支社など統制会社の事務所として使用されていました。

設計者はチェコの建築家ヤン・レツル氏で、構造は一部鉄骨を使用したレンガ造り、石材とモルタルで外装が施されていました。全体は３階建てで、正面中央部分に５階建ての階段室、その上に銅板の楕円形ドームが載っていました。

爆心地から約２００メートルの場所に位置し、原爆投下により爆風と熱線を浴びて大破し、天井から火を吹いて全焼しました。爆風がほとんど垂直に働いたため、本館中心部は奇跡的に倒壊を逃れたものの、館内にいた全ての人々は即死しています。

平和そして核兵器廃絶の象徴である原爆ドーム

鉄骨部分がむき出しの残骸と化し、いつからともなく「原爆ドーム」と呼ばれ、平成８年（１９９６年）に世界遺産へ登録されました。

静かにたたずむ原爆ドームの姿は、平和記念資料館で原爆に関する様々な資料を見た訪問団に、同じような悲劇を繰り返してはいけないと改めて強く感じさせられました。

平和記念公園内の碑めぐり

平和記念公園及びその周辺には、原爆犠牲者の慰霊碑など５０を超える原爆関連の記念碑や記念建造物があります。訪問団員は猛暑の中、それらのいくつかをじっくり見学し、戦争や原爆の恐ろしさを実感しました。

ガイドの説明に聞き入る団員たち

被爆したアオギリ

原爆の被害を訴え続けるアオギリ

爆心地から約１．５キロメートル離れた東白島町にあった当時の広島逓信局の中庭に、３本のアオギリの木が植えられていました。

原爆の投下によって、熱線と爆風をまともに受けた３本のアオギリは、枝葉が全て無くなり、爆心地側の幹の半分が焼け焦げました。

しかし、枯れ木同然だったアオギリは翌年の春、奇跡的に新芽を出し、その姿は、原爆投下と敗戦によって疲弊した人々の心に、生きる勇気と希望を与えました。

昭和４８年（１９７３年）、当時の中国郵政局（かつての逓信局）の建替えに伴い、平和記念公園内の現在の場所に移植されました。３本のうち１本は枯れてしまいましたが、この被爆したアオギリの種子は国内外に贈られ、「被爆アオギリ２世」として大切に育てられています。

峠三吉詩碑

峠三吉氏は、爆心地から約３キロメートル離れた自宅で被爆しました。その体験を文学の活動を通して発表し、原爆反対、平和擁護の作品を数多く残しました。その代表作である「原爆詩集」は、世界的な反響を与えました。

平和記念公園内の碑文には、次のような詩が刻まれています。

「 ちちをかえせ　ははをかえせ
　としよりをかえせ　こどもをかえせ
　わたしをかえせ
　わたしにつながるにんげんをかえせ
　にんげんの　にんげんのよの
　あるかぎり
　くずれぬへいわを　へいわをかえせ
　　峠　三吉　」

峠三吉詩碑にもたくさんの千羽鶴が捧げられている

島病院

昭和８年（１９３３年）に開業。原爆投下により壊滅しましたが、昭和２３年（１９４８年）に同所に再建されました。

広島市への原爆投下における爆心地として、各時代の資料に「島病院」「島外科」と記載されていますが、これらは全て現在の島外科内科に当たります。

昭和２０年（１９４５年）８月６日に原爆リトルボーイが投下された際、病院の上空でさく裂したことが調査により判明したため、同所が爆心地とされています。

爆心地の碑

原爆供養塔

爆心地に近いこの付近には、被爆後、遺体が散乱し、また、川から引き上げられたものなど、無数の遺体が運ばれ、だびに付されました。

昭和２１年（１９４６年）、市民からの寄附により、仮供養塔、仮納骨堂、礼拝堂が建立され、その後、昭和３０年（１９５５年）に、広島市が中心となり老朽化した納骨堂を改築し、各所に散在していた引き取り手のない遺骨もここに集め納めました。身内の見つからない遺骨や氏名の判明しない遺骨約７万柱が納められています。

毎年８月６日には、様々な宗教及び宗派合同の供養慰霊祭が営まれています。

供養塔を見学する団員たち

韓国人原爆犠牲者慰霊碑

終戦時、日本には約３００万人の朝鮮人がおり、数万人が広島市内で被爆したといわれています。

「死者の霊は亀の背に乗って昇天する」という故事にならって、亀を形取った台座の上に碑柱が建ち、その上に二つの竜を刻んだ冠が載せられています。

多くの花が手向けられた慰霊碑

碑は、当初、軍人であった朝鮮王家の一族李殿下が司令部への出勤途中に原爆投下に遭い、その後発見された場所付近ということから、本川橋西詰めに建立されました。

その後、各方面からの強い要望により、平成１１年（１９９９年）７月に平和記念公園内に移設されました。

慰霊碑の石は、国に帰れなかった人々への思いから、ふるさと韓国の石が使われています。

平和の鐘

核兵器と戦争の無い平和な世界の達成を目指し、その精神文化運動のシンボルとして建立されました。この鐘の音を広島から世界の隅々まで響き渡らせ、全人類の一人ひとりの心にしみわたらせることを願い、訪問者が自由に鐘を鳴らせるようになっています。

平和への思いを込め、鐘を突く団員たち

鐘は、梵鐘の分野で重要無形文化財保持者（人間国宝）である香取正彦氏が制作し、表面には「世界は一つ」を象徴する国境の無い世界地図が浮き彫りにされています。

撞座は、原水爆禁止の思いを込めて原子力のマークがデザインされており、鐘楼の周囲の池には大賀ハスが植えられています。

被爆当時、ハスの葉で傷を覆い、やけどの痛みをしのいだという被爆者の霊を慰めたものです。

とうろう流し

原爆は一瞬にして多くの命を奪いました。そして、即死を免れてもひどいやけどを負った人たちが大勢いました。その人たちの多くは、その熱さと痛みに耐えかねて近くの川に次々に身を投げ、川面には遺体が浮き、川底にも遺体が沈んでいたといいます。

戦後、駅前を中心にヤミ市がにぎわい、中心部にバラック建ての商店が建ち始めた昭和２３～４年頃、親族や知人を原爆で失った遺族や市民たちが追善と供養のた

め、手作りの灯籠を川に流したのが、「とうろう流し」の始まりと言われています。

灯籠には、亡くなった方の名前と流した人の名前を書き込むのが一般的ですが、最近は「平和への思い」が書かれる光景も目立ちます。長い歴史を持つ「とうろう流し」は、慰霊とピースメッセージの両方の意味を持つようになりました。毎年８月６日の夕刻から元安橋の上流から流されています。

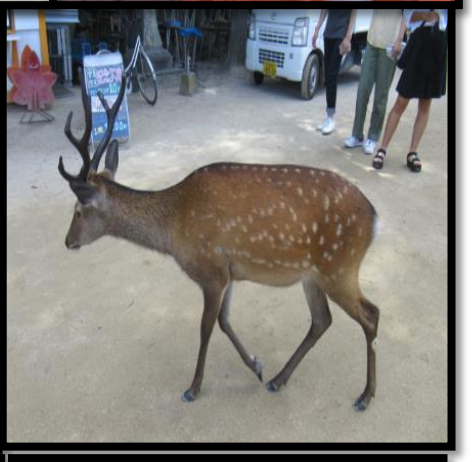
元安川を彩る灯籠

広島訪問２日目を終えた訪問団１０名は、平和施設見学や平和記念式典出席を経て感じたそれぞれの平和への思いを込めて、灯籠を流しました。

⑶ 訪問3日目・8月7日（水）

８：５３	広島駅発
１０：３０	世界遺産「厳島神社」見学
１６：５７	広島駅発
２０：３５	小田原駅着・解散

世界遺産・宮島「厳島神社」を見学

2019/08/07


２　訪問団員（参加者）の声

(1)　訪問前の感想

ア　親の声

●戦争の恐ろしさや悲しい出来事が徐々に日本人からも薄れていき、戦争という選択をまたしてしまうのではないかという恐れがあります。そのことを再度考え直し、正しい選択を自らもできるような親子になりたいと思っています。

●子供たちには平和の中で何不自由なく育ってほしいと思いますが、平和が当たり前ではないことを知ってほしいと思いました。以前から広島には行ってみたいと思っていましたが、訪問団では平和記念式典に参列、被爆者の体験談をお聴きできることは個人ではなかなか難しいので、とても魅力に感じました。

●私の祖父は近衛兵として戦争を体験しました。幼い頃から戦争の話をよくしてくれました。祖父の話を聞くのが大好きで戦争のことにも興味がわき、いつか広島に行ってみたいとずっと思っていました。自分の子供にも戦争や平和について考えてほしいと思います。

●今ある日々の生活や平和が、戦争という悲劇によってもたらされているということを忘れてしまいがちだと思います。子供と一緒に体験することで、次の世代にも語り継いでいきたいと思います。

●今回の訪問の第一の目的は、原爆投下の当日の状況をできる限り体感することです。辛いことになると思いますが、心が痛くなるようなことがあっても、それは大切なことであり、真正面から向き合わなくてはならないことです。そして、帰宅後には、平和についてより強く感じることとなると思っています。

イ　子どもの声

●最近、戦争のことを忘れてきている人が多いので僕たちが広島に行き、みんなに伝え、戦争のことを深く知ってもらいたいと思っています。

●学校で原爆や戦争のことを学んだけれど、まだまだ理解していないところもあったので、参加しました。平和が当たり前ではないということも知りたいし、戦争で亡くなった人々の苦しさなどをいろいろ知りたいです。

●僕は戦争のことはよく知りません。でもこの「親子ひろしま訪問団」に出会えたので、頑張って戦争や平和について学びたいです。

●私は「親子ひろしま訪問団」に参加するのが初めてなので何があるのかわからないけれど、平和の大切さ、原爆の怖さをしっかりと聞いてみんなと交流したいです。

●私が日頃から考えている平和とは、人々が皆平等で助け合い、たとえ争いごとが起きても、周りの人を説得したりして、大きくなる前、つまり、小さいうちに無くせる。そしてこの一連の動きを自然にできる、誰もが協力する社会だと思っています。学校の道徳の授業などでも学習するのですが、やはり結論としては、「皆が手を取り合う環境」というのが、私なりの平和を表す言葉だと思います。

⑵　訪問後の感想

ア　保護者の声

●今回参加したことによって、本当の姿を目にすることができ、また、被爆者のお話を直に聞くことで実際に広島で起きたことを自分の中に感じることができたと思います。確実に参加する前と後とでは、戦争に対する自分の考え、捉え方が変わったと思います。今までは遠い昔のことで、自分との間に隔たりがあったと思いますが、戦争と自分が一本の糸でつながったように感じます。

●本やテレビを見て知識を得ることはできますが、実際に現地に行くことは全く違いました。これまでずっとテレビで見ていた平和祈念式典に参列でき、その雰囲気を肌で感じることができて本当に良かったです。増岡さんや碑めぐりのボランティアさんの、広島で生きてこられた方のお話もとてもためになりました。親子で平和について考える機会を与えていただき、ありがとうございました。

●正直４年生の子供にはまだ理解できないかなと思っていましたが、今回「親子ひろしま訪問団」の一員にさせていただき、見たこともないような悲惨な写真や資料に触れ、子供ながらに衝撃を受け、私が思っていた以上に戦争や平和について考え、勉強していました。被爆体験のお話もよく聞き、親子で話し合うなど、とても良い体験になりました。平和祈念式典の参列も一生に一度あるかないかの経験で世界中、日本中の人々が集まり、平和を願い、二度と過ちを繰り返してはならないと誓うことも親子共々、考えさせられました。

●戦争の悲惨さは知っている、わかっていると思っていましたが、広島に行き平和を願う人たちがこれほどまでに多く集まっていること、今なお世界の至るところで戦争が起きていることなどを実感し、日々の平和な毎日が当たり前ではないと痛感しました。増岡さんがお話されていた、身近な人に優しくすること、他人を思いやる心を忘れずに生きていきたいと思います。

●毎年メディアを通じて広島・長崎、及び戦没者追悼式をこの時期に見てきました。今回機会を得て広島行きとなり、直に鎮魂の思いを捧げられることになりましたが、

実感がありませんでした。しかし、千羽鶴拝納から式典参列、被爆体験談聴講、碑めぐり、とうろう流しと一連の行事を通して、メディアで感じていた儀礼的なことよりも深いものを思い知らされました。帰宅後も、学んだことをもとに調べたり、戦争番組をより感じ取れるようになったと思います。

イ　子どもの声

●今回広島に行って戦争の悲惨さなどを知ることができ、二度と戦争を起こしたくないと改めて思いました。今度は僕たちが他の人に伝える番なので、ちゃんとみんなに伝えられるように頑張りたいです。

●今回の訪問で学校で教えてもらったことなどをより詳しく知ることができたし、いつでも平和なことばかりではないということもわかりました。これから先、戦争が起こらない平和な国が私の理想です。

●広島での三日間は僕にとって忘れられない思い出になりました。特に平和記念資料館で、色々な写真を見て、胸が痛くなりました。もう二度と戦争を起こしてはいけないと思いました。

●今までより戦争についての怖さが増した一方、平和に対する意識がとても高くなったと思います。日本は今は平和ですが、いつ戦争が起きるかわからないので、いつも人に優しくすることをしっかりと決めて生活していきたいです。また、たくさんの人のお話を聞くことができたので、生活に生かしていきたいです。そして、平和の尊さを友達や家族に伝え、平和を大切にしていきたいです。

●私は広島を訪れる前は「原爆とは、皆真っ黒に焼け、皮膚がただれる」くらいしか知りませんでした。今回実際に被爆地に足を運び、原爆とは、亡くなった方も、生き延びた方も、辛い経験をした、とても残酷なことだということを、平和記念資料館などを見学してわかりました。そして、戦争はたくさんの人々を苦しめたので、もう二度と繰り返してはいけないものだと、改めて思いました。

３　団員名簿（めいぼ）

保護者　氏名	子ども　氏名	役　　割
栢沼（かやぬま）　真紀子（まきこ）	栢沼（かやぬま）　和輝（かずき） 南小６年	団　長
吉田（よしだ）　奈保（なほ）	吉田（よしだ）　茉莉衣（まりい） 西中１年	副団長
吉田（よしだ）　裕子（ゆうこ）	吉田（よしだ）　蒼太郎（そうたろう） 堀川小４年	記　録
柳川（やながわ）　多恵（たえ）	柳川（やながわ）　紗菜（さな） 渋沢小６年	会　計
剱持（けんもつ）　麻里子（まりこ）	剱持（けんもつ）　麻美（まみ） 渋沢小６年	監　事

４　訪問団規約

（名 称）

第１条　この訪問団の名称は、親子ひろしま訪問団（以下「訪問団」という。）という。

（目 的）

第２条　訪問団は、原爆被災地である広島を訪問し、団員自らがその目で戦争の悲惨さを見ることにより、平和の尊さを学ぶことを目的とする。

（事 業）

第３条　訪問団は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

⑴　原爆ドーム等を視察することにより、原子爆弾を始めとした戦争兵器使用による殺りくの悲惨さを学ぶ。

⑵　平和祈念式典に参加することにより、無意味な戦争の否定を決意するとともに、恒久の平和の追求を決意する。

⑶　原子爆弾が投下され、壊滅的な被害を受けながらも希望を持って築きあげられた今日の広島市等を視察することにより、平和の尊さ及び不屈の努力の成果を学ぶ。

⑷　その他目的を達成するために必要な事業。

（組 織）

第４条　訪問団は、公募等の方法による希望者から選ばれ構成される親子５組１０人により組織する。

２　訪問団に、団長、副団長、会計、監事及び記録を置き、それぞれ訪問団員の互選により定めるものとする。

３　団長は、訪問団の事業を総理し、訪問団を代表するものとする。

４　副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行するものとする。

５　記録は、訪問団の事業を記録するものとする。

６　会計は、訪問団の経理を処理するものとする。

７　監事は、会計を監査するものとする。

８　訪問団の事務局は、秦野市役所平和主管課に置く。

（解 散）

第５条　訪問団は、第２条の目的を達成したときに解散するものとする。

（経 費）

第６条　訪問団の経費は、訪問団員の自己負担金、市からの補助金、その他の収入をもって充てる。

（その他）

第７条　この規約に定めるもののほか、訪問団の運営に関して必要な事項は、団長が定めるものとする。

附　則

この規約は、平成７年６月１５日から施行する。

この規約は、平成２８年４月１日から施行する。

この規約は、平成３１年４月１日から施行する。

Ⅱ　はだの平和の日のつどい

訪問を終え、秦野の地へ帰った親子ひろしま訪問団は、８月１７日（土）に秦野市文化会館ホワイエにて「平和の日事業」として開催された「はだの平和の日のつどい」で、来場した１００名を超える観客を前に訪問の活動報告を行いました。彼らが肌で感じ、学んできた、その生の声は、会場の市民の心にも深く刻まれました。

なお、今年度の「はだの平和のつどい」では、公募市民５団体によるコンサートも行われました。

【１６：００～】開　会

ピースキャンドルナイト実行委員会の森田委員長の挨拶により開会しました。

【１６：１５～】コンサート①

平和への思いを込め、２団体が演奏を披露しました。

【１７：３０～】親子ひろしま訪問団活動報告

団員１０名が自分の言葉で、広島で学んだことを報告しました。

【１８：３０～】コンサート②

平和への思いを込め、３団体が演奏を披露しました。

Ⅲ　資　料

１　秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文

◎秦野市民憲章

わたくしたち秦野市民は、丹沢の美しい自然のもとで、このまちの限りない発展に願いをこめ、ここに市民憲章を定めます。

１　平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。

１　きれいな水とすがすがしい空気、それは私たちのいのちです。

１　健康ではたらき若さあふれるまち、それは私たちのねがいです。

１　市民のための豊かな文化、それは私たちののぞみです。

１　みんなの発言で住みよいまちを、それは私たちのちかいです。

この市民憲章は、秦野市の発展を願って昭和４４年１０月１日に制定したものです。

◎秦野市平和都市宣言

私たち秦野市民は、平和への限りない願いをこめて「平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。」と市民憲章に定めた。

私たちの責務は、この精神にのっとり永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り次代へ引き継いでいくことである。

しかし、武力紛争は世界各地で絶え間なく続き、際限のない軍備拡大と核兵器の増強は、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

世界の恒久平和は、すべての人々の切なる願いである。私たち秦野市民は、国際平和年に当たり非核三原則を堅持するとともに、永久の平和とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和６１年３月２７日制定

◎秦野市平和の日制定について

私たち秦野市民は、永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り引き継いでいく精神をうたった秦野市民憲章と秦野市平和都市宣言の理念の下に、一人ひとりがそれぞれの信条や立場を越えて、平和についてともに考え、語り合うことにより、平和への願いを未来に向け継承していくため、ここに「秦野市平和の日」を制定します。

秦野市平和の日　毎年８月１５日

平成２０年６月９日制定

２　広島市平和宣言（せんげん）

今世界では自国第一主義が台頭し、国家間の排他的、対立的な動きが緊張関係を高め、核兵器廃絶への動きも停滞しています。このような世界情勢を、皆さんはどう受け止めますか。二度の世界大戦を経験した私たちの先輩が、決して戦争を起こさない理想の世界を目指し、国際的な協調体制の構築を誓ったことを、私たちは今一度思い出し、人類の存続に向け、理想の世界を目指す必要があるのではないでしょうか。
特に、次代を担う戦争を知らない若い人にこのことを訴えたい。そして、そのためにも１９４５年８月６日を体験した被爆者の声を聴いてほしいのです。

当時５歳だった女性は、こんな歌を詠んでいます。
「おかっぱの頭(づ)から流るる血しぶきに　妹抱(いだ)きて母は阿修羅(あしゅら)に」
また、「男女の区別さえ出来ない人々が、衣類は焼けただれて裸同然。髪の毛も無く、目玉は飛び出て、唇も耳も引きちぎられたような人、顔面の皮膚も垂れ下がり、全身、血まみれの人、人。」という惨状を１８歳で体験した男性は、「絶対にあのようなことを後世の人たちに体験させてはならない。私たちのこの苦痛は、もう私たちだけでよい。」と訴えています。
生き延びたものの心身に深刻な傷を負い続ける被爆者のこうした訴えが皆さんに届いていますか。
「一人の人間の力は小さく弱くても、一人一人が平和を望むことで、戦争を起こそうとする力を食い止めることができると信じています。」という当時１５歳だった女性の信条を単なる願いに終わらせてよいのでしょうか。

世界に目を向けると、一人の力は小さくても、多くの人の力が結集すれば願いが実現するという事例がたくさんあります。インドの独立は、その事例の一つであり、独立に貢献したガンジーは辛く厳しい体験を経て、こんな言葉を残しています。
「不寛容はそれ自体が暴力の一形態であり、真の民主的精神の成長を妨げるものです。」
現状に背を向けることなく、平和で持続可能な世界を実現していくためには、私たち一人一人が立場や主張の違いを互いに乗り越え、理想を目指し共に努力するという「寛容」の心を持たなければなりません。
そのためには、未来を担う若い人たちが、原爆や戦争を単なる過去の出来事と捉えず、また、被爆者や平和な世界を目指す人たちの声や努力を自らのものとして、たゆむことなく前進していくことが重要となります。

そして、世界中の為政者は、市民社会が目指す理想に向けて、共に前進しなければなりません。そのためにも被爆地を訪れ、被爆者の声を聴き、平和記念資料館、追悼平和祈念館で犠牲者や遺族一人一人の人生に向き合っていただきたい。
また、かつて核競争が激化し緊張状態が高まった際に、米ソの両核大国の間で「理性」の発露と対話によって、核軍縮に舵(かじ)を切った勇気ある先輩がいたということを思い起こしていただきたい。
今、広島市は、約７，８００の平和首長会議の加盟都市と一緒に、広く市民社会に「ヒロシマの心」を共有してもらうことにより、核廃絶に向かう為政者の行動を後押しする環境づくりに力を入れています。世界中の為政者には、核不拡散条約第６条に定められている核軍縮の誠実交渉義務を果たすとともに、核兵器のない世界への一里塚となる核兵器禁止条約の発効を求める市民社会の思いに応えていただきたい。

こうした中、日本政府には唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約への署名・批准を求める被爆者の思いをしっかりと受け止めていただきたい。その上で、日本国憲法の平和主義を体現するためにも、核兵器のない世界の実現に更に一歩踏み込んでリーダーシップを発揮していただきたい。また、平均年齢が８２歳を超えた被爆者を始め、心身に悪影響を及ぼす放射線により生活面で様々な苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。

本日、被爆７４周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和元年（２０１９年）８月６日

広島市長　松井（まつい）　一實（かずみ）

３　（広島）こども代表「平和への誓（ちか）い」

私たちは、広島の町が大好きです。
ゆったりと流れる川、美しい自然、
「おかえり。」と声をかけてくれる地域の人、
どんなときでも前を向いて生きる人々。
　広島には、私たちの大切なものがあふれています。

昭和２０年（１９４５年）８月６日。
あの日から、血で染まった川、がれきの山、皮膚がはがれた人、たくさんの亡骸、
見たくなくても目に飛び込んでくる、地獄のような光景が広がったのです。
大好きな町の「悲惨な過去」です。
被爆者は語ります。「戦争は忘れることのできない特別なもの」だと。

私たちは、大切なものを奪われた被爆者の魂の叫びを受け止め、
次の世代や世界中の人たちに伝え続けたい。
「悲惨な過去」を「悲惨な過去」のままで終わらせないために。
二度と戦争をおこさない未来にするために。

国や文化や歴史、
違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。
みんなの「大切」を守りたい。

「ありがとう。」や「ごめんね。」の言葉で認め合い許し合うこと、
寄り添い、助け合うこと、
相手を知り、違いを理解しようと努力すること。
自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにもできることです。

大好きな広島に学ぶ私たちは、
互いに思いを伝え合い、相手の立場に立って考えます。
意志をもって学び続けます。
被爆者の思いに、私たちの思いを重ねて、平和への思いを世界につなげます。

令和元年（２０１９年）８月６日
こども代表

広島市立落合小学校　６年　金田（かねだ）　秋佳（しゅうか）
広島市立矢野小学校　６年　石橋（いしばし）　忠大（ただひろ）

令和元年度

親子ひろしま訪問団

訪問の記録

編集発行　秦野市文化スポーツ部文化振興課
〒257-8501 秦野市桜町１－３－２
TEL ０４６３－８６－６３０９